一、書くことの意義をこう考えてきた

昨年、NHK で「地球大進化46億年」という特集番組をやっていました。その最終回、興味深い説で終わりました。これまで、地球上で繁栄し、頂点に達した生物は、その繁栄を支えた要因のために滅んでいきました。たとえば、恐竜は、巨大で屈強な肉体によって世界を支配したけれど、その巨大化した肉体のために滅んでしまいました。では、現在、地球を支配している人間はどうなのか。ある時期、人類の祖先達は、いくつかの種類が共存したといいます。しかし、私たちの直接の祖先のホモサピエンスだけが生き残ったのです。その理由は、のど仏の位置にあるということでした。他の原人に比べて、ホモサピエンスののど仏が下にあったという、そのことが生き残りのカギとなったのだと。これは、豊かな音声を出すことを可能にし、複雑な音色の組み合わせである言語の発声を可能にしたのです。つまり、コミュニケーションの手段と、知識という財産を伝える手段としての言語を獲得できたかどうかというのが、運命の別れ道だったのです。ということは、歴史的にみて、私たち人類は、この言語によって滅びるということになります。最近の動向を見ていると、確かにそんな気持ちもしてきます。

いずれにしても、人間にとって、言語がきわめて重要なものであることは、「地球大進化」というレベルでも位置づけられているということです。

またまた大上段に構えてしまいましたが、「書く」ことの大切さを、言語の大切さに直結するものとしてとらえています。

書くという作業は、次のような意味をもっているととらえています。

「認識・表現・伝達」の三位一体

言語認識

書くという作業は、自分の思想なども含めた現実をことばによってとらえ、認識することです。子どもの作文や詩の場合は、自分をとりまく人（家族・友だちなど）とのできごとを多く書くことになるでしょう。このことが、人間理解につながります。それだけに、このはたらきを重要視してきました。

書く場合は、書こうとする対象を思いだし、ことばに置きかえる時に、いちいちを再確認していくという、かなり複雑な精神的作業になります。また、いったん書いたものを読む時、さらにそのできごとについての認識を新たにしたり、他に読み手がいる場合には、自分の認識の弱さや誤りを訂正されることもあるでしょう。そうやって、書くという行為は、読むという行為まで含めて、認識の作業の連続になると思われます。

言語表現

作文や詩を書くということは、言語による自己表現です。表情・身振り・声の大きさ・言い方などを駆使した音声言語による表現と違って、文字による表現は言語の力だけにたよった表現です。自分の言いたいことや思いなどを、冷静に表現することになります。今の子どもたちは、短絡的に結論を出したり、短絡的・衝動的な行動に走りがちです。そういった意味でも、紙に向かってじっくりと考えて、自分のことばで自分を表現することは重要だと思います。

伝達

言語は、伝達の手段です。自分が認識したことや自分の感情を言語に置きかえて、だれかに示すのは、相手に伝えるためです。また、伝える意図がなかったとしても、言語によって書かれたものがだれかに読まれるということは、読み手に伝達することになります。日記でさえ、わかるように書いているということは、だれか読み手を意識しているということでしょう。子どもたちの作文の中には、独りよがりなものがあって、書き足りていないことが多くあります。こうした場合、「だれが読んでもわかるように書こうよ」と言ったりします。「だれが読んでもわかる」というのは、ていねいな思い出しや、表現を要求しますから、当然、豊かな言語認識や表現にもつながります。

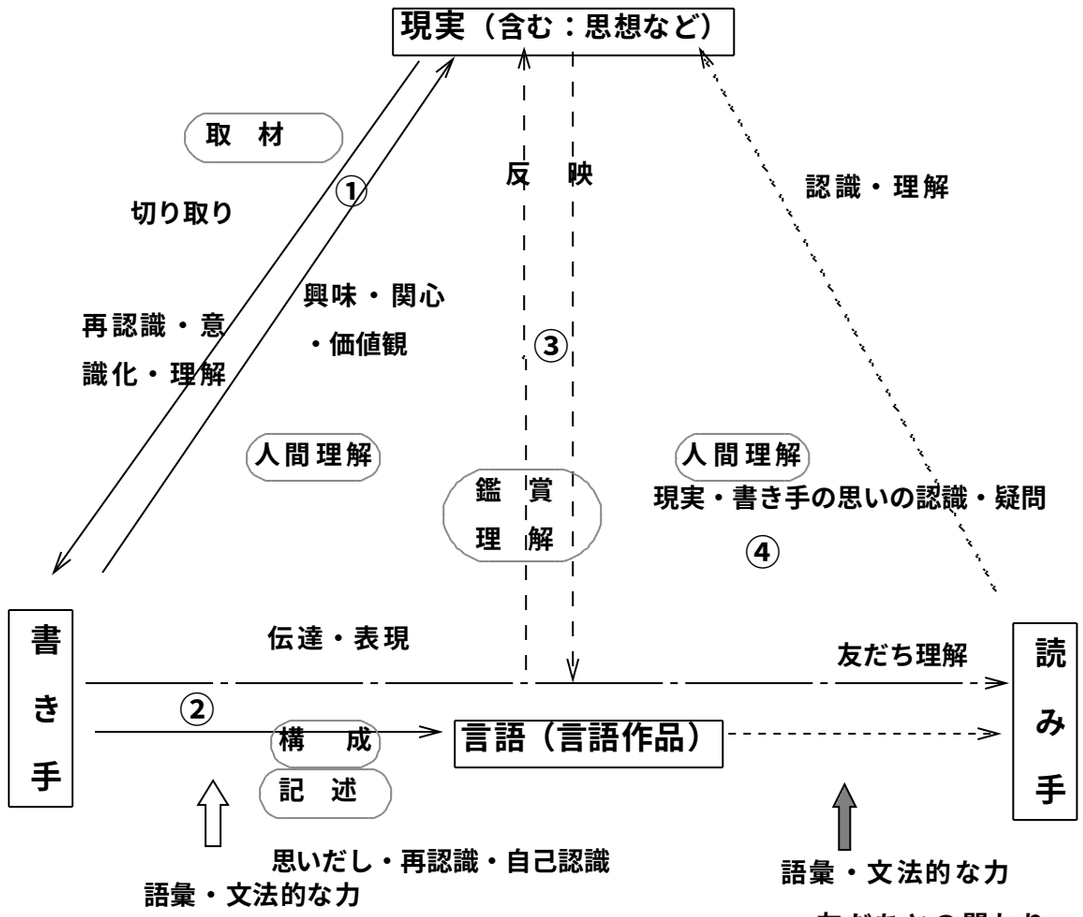
僕は、書くという作業を、以上の三点が有機的に結びついた作業だととらえてきました。このどれもが重要で、書くという作業をていねいに行うことが、すなわち、書き手を人間として豊かにしていくと考えます。まさに、教育基本法の教育の目的に直接に迫っていく活動だと考えます。

子どもたちの作文や詩の場合は、それだけではなく、おたがいに書いたものを読みあうという活動もあります。この、読むという活動によって、読み手は書き手の生活現実や思いなどを知ることができ、理解を深めることになります。それがうまくいった時、作文や詩は、学級集団をつなぐ大きな力となります。

文科省も、「読むこと」「書くこと」を重視しているようです。しかし、そのなかみをみると・・・。「書くこと」についていえば、「伝えあう力」の重視ということで、伝達の役割に偏重しています。逆に、現実を認識するということばの役割は、ほとんど意識されていません。そのために、「相手を意識した」伝える技術に重きが置かれることとなり、内容的には、「手紙」「招待状」「報告文」「お知らせ」などといったものが書く対象となっていて、いわゆる生活文はほとんど相手にされていない状況にあります。子どもたちに、魂もなかみもない文を、いかに相手に伝わるように書くか、ということに終始します。これでは、プレゼンの上手な子どもは育てられても、人間として豊かになる方向にはいかないでしょう。「書くこと」も「読むこと」も実用主義になっているのが、文科省の方針です。これは、財界の意向を大いに反映したものだろうと思えます。人間の育成ではなく、人材の育成を進めているのです。

書くという作業の実際と指導のポイント

実際に、作文や詩を書くというのは、次の図のようなしくみにあると考えています。そのポイントごとに、指導のなかみがあり、行うべき授業があるのだろうと思うのですが、実際には、きちんとした授業化はできていません。ただ、日常的に書かせているときに、こうしたしくみを意識してやっています。



① いわゆる取材

子どもたちは、自分の興味や関心、生活体験や価値観によって、あるできごとを選んで書きます。

まず、ここで、書きたいことを書けばよろしい、というふうに進めてもいいのですが（実際、かなりの割合でそうしていますが）、子どもたちの世界を広げるためにも、いろんなことに目を向けさせたいと思います。ですから、僕の方が書くできごとを指定するということもよくあります。その時の基本は、「だれかとのかかわりがあるできごと」ということです。五年生でも、これがなかなかむずかしいようでした。また、自然を対象とする場合でも、自分や人とのかかわりをもった自然をとらえさせたいと思いました。それは、自己中心的な世界にとどまらせたくないという思いと、自分は人とのかかわりの中で生きているということ、つまりは、取材の段階から、人間理解につなげたいという思いがあるからです。つまり、ここでは、

★　子どもたちの意識を広げるための取材の授業

があります。基本的には、ひとつのできごとをとらえればいいのですが、高学年になると、長い期間にわたるできごとを対象とすることもあります。この場合は、

★　何を書きたいのかをはっきりさせる授業（主題を意識する授業）

も必要になってきます。実際には、記述の場面で行うわけですが、意識としては、主題がはっきりしなければ、切り取る現実も明確になりません。僕自身は、こうした長い期間のできごとを書かせることが苦手で、実際には、ちゃんとした指導ができないまま、子どもたちが自然発生的に書いた（ほとんどありませんが）というの実状です。

②　記述

実際に記述する場合、まずは、とらえたできごとを切り取ることが必要です。この切り取りが、子どもたちにとってはなかなかむずかしいようです。そこで、

★　書き出しの工夫（音から書く・会話から書く・思いから書くなど）のための授業

★　長い題名を書く（主題意識をもつ）ための授業

があります。どちらにしても、一時間使うようななかみではありませんから、記述の前の指導ということになるでしょう。

また、長い間のできごとを書く場合には、どうしても

★　構成を考えるための授業

が必要でしょう。ただ、これは、やりすぎると、構成を考えるだけで子どもたちが力尽きてしまうようなこともあります。

さらに、記述は、日本語を使ってやるわけですから、当然、語彙・文法の力を駆使することになります。ということは、★語彙・文法の力をつけてやることが必要です。これは、本来、言語の教育として体系的に進めるべきものですが、日本の国語教育では、ちゃんとした文法を教えるしくみにはなっていません。自主編成せざるをえない状況です。それでも、少しは作文に役立つことがらは教えたいと思います。表現したいことを表現したいように表現する力をつけてやりたいと思います。そこで、

★　書き方の授業

というのも必要になります。これは、技術ではなく、現実を的確に表したり、自分の思いを効果的に表現するための授業です。僕の場合は、どの学年をもっても、主語を工夫するという授業をやっています。また、

★　くわしく書くとはどうすることなのか、ということをわからせる授業

も必要です。「くわしく書きなさい」と何度言ってもダメです。そのための書き方を教える必要があります。くわしく書くというのは、ていねいに思いだすことであり、それはすなわち、ていねいに再認識するということでもあります。くわしく書こうとすることによって、新たな認識がうまれることもあるはずです。

書き終わったら、推敲ということになるのでしょうが、僕は、ほとんどできていません。いったん書いてしまうと、子どもたちは、もう全部書いた気になっていますから、なかなか推敲という気持ちにはなれないようです。いいとこ、誤字脱字の訂正くらい。それでも、内容によっては、書きくわえを要求することがあります。書いた本人が気がついていない価値あるできごとがそこにある場合、まずは、本人に知ってもらうために書きくわえを要求します。それは同時に、クラスの友だちにとっても価値あるできごとなので、クラスで共有したいと願うからでもあります。また、詩の場合には、できれば、詩的表現を教えるためにも、推敲は推奨されるべきものだと考えます。特に高学年の場合は、ことばにこだわるようになってほしいと思います。が、これもできていません。

③④　鑑賞

★　書いた作文や詩を、クラス全体で読みあう授業

をします。普通の生活や会話だけではわからない友だちの思いや暮らしぶりがわかります。読みあうことで、お互いの理解にもつながります。また、友だちの作文の中に出てくる家族などの暮らしぶりにもふれることができ、さらなる人間理解にもつながります。また、書かれているできごとを共有している友だちがいる場合、書いた本人の認識の誤りや

不十分さが指摘されることもあります。そうやって、本人が、認識を新たにすることにもなります。

また、記述のこととして、友だちの書きぶりや語彙・文法の選択を知って、表現のしかたを学ぶことにもなるでしょう。これは、特に、詩の表現を学ぶ場合に有効だと思います。

僕の場合は、全員の作品を文集に載せ、印刷できた段階で読みあうようにしてきました。また、文集の中では、必ずコメント入れ、なかみや書きぶりなどを褒めるようにしてきました。2学期くらいからは、「ここをもっと書いてほしい」とか、「このようすがよくわからない」とかの注文も書くようにしますが、それによって書くのがイヤになったりしないようには配慮してきたつもりです。

以上が、「書く」ということについての僕の基本的な考えです。なんとも深みのない、軽いものではありますが、せめてこれくらいの思いをもっていれば、どんなに忙しくても、子どもたちに書く機会を与えるように意識することができます。

何かと多忙な高学年。本当に腰を落ち着けて作文の指導をする時間がありませんでした。それでも、「書く」ことについての意義を重要視していますから、無理のないよう、肩肘を張らず、作文指導？を続けてきました。授業がどうのこうのといわず、まずは、子どもたちに書く機会を与えていくこと自体が意味あることだと思います。

二、昨年度、五年生でやってきたこと

何度も繰り返しますが、きちんとした作文の授業としては、やれていません。細切れに、ワンポイントレッスン的にやってきただけです。すばらしい授業の報告を期待して、ここに参加してこられた方には、本当に申し訳ありません。ただ、その分、これくらいのことなら自分でもできる、と思ってくだされば、さいわいです。

■　現実認識の広がりをめざして

要は、取材対象を広げるということです。

阿波小学校は、岡山県と鳥取県の県境、中国山地の中にある小さな小さな学校です。昨年度までは、人口七百人ほどの岡山県で一番小さな自治体でしたが、「平成の大合併」のあおりを受けて、「阿波村」という村はなくなってしまいました。そんな、小さな自然いっぱいの地域で、子どもたちもほとんどが三世代～四世代同居の家庭です。こういうことを言うと、「いいですねえ、自然がいっぱいで。」「さぞ、子どもたちは、家族の愛や自然の中で大らかにくらしているのでしょう。」などという反応をもらいます。が、子どもたちの実態は、街の子どもたちとほとんど変わりません。学習塾が近くにないので、塾通いの子はいませんが、ピアノなどの習いごとには行っているし、夕方や休日はスポーツ少年団で忙しく活動し、何もない休みの時間は、家の中でゲームをしたり、自転車を乗り回して遊ぶくらいです。また、親のほとんども、働きに出ていて、忙しくしています。さらに、家に田んぼがあっても、おじいさん世代が中心になって田んぼ仕事をしてしまい、農業を手伝うということがありません。せっかくの環境を活かすことができていないのが実態なのです。

そんなこともあって、意識して自然に触れあうように仕組んできました。

新聞　第3種郵便物認可

手作り品売って ユニセフへ募金

阿波小学校5年生が村内に開店

阿波村の阿波小学校5年生14人が、手作りの組上物や自分たちで育てた花の苗などを売る「5年店」を村内の観光施設・阿波交流館前に開いた。益金はユニセフ（国連児童基金）への募金に充てることにしており、来年3月までに2万円の売り上げを目指して頑張っている。

細工や花の苗 目標2万円

兄弟会の益金計画は、これまで家族が出していたが、兄弟会から「自分がしたことにならない」と声が上がり、総合学習で取り組むことにした。

岡山の宿泊・食事客や農繁期の農家向けに開いている青空市のテントの一角を借り、四月末に開店。古品についての理解も深めようと、阿波ならではの品ぞろえを心がけ、放課後や休日にせっせと山で摘んだワラビ、コゴミなどの山菜、竹を加工して作ったじょうろや、松ぼっくりに色付けした飾り物などを二十円～二百円で販売。働き手を思いた直接で協力を呼び掛けている。

本作業手志での目標二万円へ向け、既に約七千円を売り上げた。今後は、自分たちで育てたカーネーションの苗や、漁師で釣ったヤマメなども並べたいという。

中筋麻衣さん（9）と阿波美咲さん（9）は「村の人の子どもたちの役に立とうと、みんなから品を出している。山菜採りや、売り物を作る作業も楽しい！」と張り切っている。

販売や商品管理は同交流館に依頼している。営業は午前十一時～午後七時。水曜定休。

ユニセフ募金のために「5年店」の前で、商品を手にする阿波小の5年生

また、五年生の総合学習では、ここ数年、米作りがなされてきました。本来なら、家でやるべきことだと思うのですが、しかたありません。学校では、無農薬有機栽培での米作りに取り組みました。また、ユニセフ募金をかねて、自分たちが山などから採ってきた山菜や、自然素材を使った小物、それぞれが工夫して作ったものなどを売る「テナント」を出し、「商売」をしてきたりしました。そのほとんどは、地元を知ろうということを念頭に置いてのことでした。

そこで、まずは子どもたちが一緒にやったさまざまな活動のあとには、書く活動を入れていきました。

・つくし料理をつくった　・草取りをした　・ミズブキをとった　料理した

・田植え　・稲刈り　・脱穀　・石焼きいも

たとえば、「つくし」や「ミズブキ」。一昔前なら、子どもたちはつくしをとってはかまを取り、家の人に料理してもらったことでしょう。また、ミズブキは、僕が阿波小学校に来た年に、六年生の子が「先生、これおいしいんで。」と教えてくれたものでした。それまで、僕自身が知らない山菜でした。でも、ほんの少し前までは、この学校の子なら、普通に知っていた山菜だったのです。ところが今、どの学年の子も、ミズブキを食べたこともなければ、どれがミズブキかも知らないのです。つまりそれは、親が知らないということでもあります。子どもが自然から遠ざかっているのは、親が自然から遠ざかっているからでもあるのです。そういった阿波の自然のことを、子どもたちに知らせたいと思いました。

また、行事に限らず、大きなできごとのあった時には、時間割を変更して、書くようにしてきました。昨年の場合は、何度も台風の襲来を受けました。その全部を書くことはできませんでしたが、その時の家族のようすなどに心を向けてほしくて、書かせました。

そして、何よりとらえさせたい人間のこと。家族や友だちとかかわったことに心を向かせたいと思います。

・てつだいをしたこと（五月の連休中の「くらしのノート」の課題）　・～と～をしたときのこと

・台風十八号　・心が動いたこと　・人の姿を見つめて

これは、課題にした最初のもの以外は、すべて、作文の時間として設定したものです。何を書くのか、取材期間をとり、当日は、いくらかの簡単な指導をして書かせました。記述の時間は、一応、二時間続きでとるのですが、僕の指導不足もあって、子どもたちのほとんどは、長文を書く力はつきませんでした。そのため、二時間のうちのかなりの時間をもてあます子がいました。それでも、書くのに時間がかかる子もいるので、家での宿題にしたくないという思いもあって、二時間を確保しました。

■　文と現実

これは、文法的なことがらです。ただし、文法は、ただの「おたく」のものではなく、現実や気持ちを表現するものだという基本的な考えをもっていますから、そうした立場で、子どもたちに指導していきます。ただ、先に書いたように、本来は、とりたてた体系的な言語の指導があってしかるべきですが、実際には、なかなかそういうわけにはいきません。そこで、子どもたちには、せめて、どんなことがらでも、いろんな側面に目を向けてとらえてほしいという願いを込めて、「主語の選択」の指導をするようにしています。これは、全学年でできることです。

昨年の場合は、梅雨時の雨の日と冬の雪の日に、主語に「雨」や「雪」を使わないで、雨や雪を表現するという学習を設定しました。これは、ひとつの写生のようなものです。ステレオタイプでとらえるのではなく、自分で動いて、実際にさわったり聞いたりした事実を書くことで、雨や雪を表現させたいと思いました。

子どもたちは、ややもすると、「雨が降っています。」という一文で、ことを済ませてしまおうとします。しかし、雨の降り方というのは、その時々によって違うし、自分の気持ちによっても違うものです。そうしたことを、さまざまなことに目を向けさせ、それを主語として文を書き、その積み重ねで雨全体を表現するということをさせます。

子どもたちは、教室から出られるということもあり、けっこう喜んで取り組みます。しかし、いざやってみると、ものごとを概念的にとらえがちの子にとっては、かなりむずかしい作業であることがわかります。こうした学習の積み重ねが、ひとつのできごとを多面的にとらえ、表現力を豊かにすることにつながると信じています。

■　自己表現として

子どもたちは、いろいろな思いをかかえています。ましてや、高学年になってくると、女の子を中心にさまざまな思

いに悶々とした気持ちになっていることもあるものです。しかし、それをストレートに表現することは、なかなかできません。帰りの会などで出してくれればいいのですが、そういうこともなくなってしまいます。だからといって、文で書くのかといえば、そうでもありません。ただ、そうした場は保証できるようにしておきたいと思います。

昨年度の子も、四年生の時に、女の子の中でいろんな衝突があり、しんどい思いをしていた子もいたようでした。しかし、五年生になってからは、エネルギーが外にむかうようになったことと、子ども自身の成長もあって、そうしたじめじめしたトラブルはなくなっていきました。ですから、作文としては、子ども同士の関係のことでしんどい思いをしているなどというものは出てきませんでした。

ただ、不定期に「くらしノート」を書くことを要求したり、ことあるごとに、「詩のようなもの」を書かせてきました。そういう書く場があることで、子どもたちは、ラフに自分を表現してきました。ある意味では、「ガス抜き」のようなものだったかもしれません。きちんとした授業でなくても、とにかく書くという機会があるということが大切だと感じています。

表現の方法としては、先の「文と現実」で書いたようなことや、「感情表現をひかえること」、そして何より、「事実を書く」ということを強調してきました。しかし、残念ながら、うまくいったとは言えませんでした。概括的に書くことを覚えてしまっている子は、ついに、そこから抜け出せませんでした。感情表現を書くことで、まとめてしまいたい子は、最後まで、そうした傾向が強かったようです。ただ、他の子の作品を読む中で、何かを感じてくれただろうとは思います。

今年は、以前からやりたかった「方言詩を書く」ということもやってみました。方言で表現すれば、よそ行きではない素直な表現ができるのではないかと思っているからです。よく目にする関西弁の詩などは、ストレートで心地よさを感じます。共感もします。子どもの本音が出ているように思えます。そんなことをめざして取り組んでみました。が、関西弁と違って、このあたりの方言、作州弁は記述するにはなかなかむずかしい言い回しです。しゃべるには簡単ですが、書くにはむずかしいようで、方言を文字化することにくたびれてしまい、結局、書けなかった子がたくさんいました。ただ、何度も書かせていけば、慣れてくるのかもしれないとも感じました。今後の課題です。

少人数の学級ですが、複数の人の中ではほとんどしゃべらない子もいました。こうした子にとっては、書くということは、大切な自己表現の場になっていただろうと思います。そのなかみが、どれほど「つまらない」ものであったとしても、本人がそのことを書いたということが価値あることだと思っています。

今の世の中、ネットなどのバーチャルな世界で無責任に表現することが横行しています。また、バーチャルとリアルを混同して、犯罪に走ってしまったり、自分を傷つけてしまうということもよくあります。作文や詩、日記は、リアルな現実に根ざしてなされるものです。バーチャルな世界に進む前に、しっかりと現実をみる心を養いたいと思います。そうすることで、仮想世界に振り回されない、無責任な匿名発言をしない、そんな人間に育ってほしいと願っています。

■　人間理解を意識して

これが一番の作文教育の目標だと思っています。サークルで、最初に教えられたこと、それが、「人間理解」でした。

どんなに書けなくても、子どもたちにまわりの人たちを意識して見させたいと心がけてきました。昨年度の子どもたちも、家族のことについて、ほとんど無頓着でした。よく言われている「親の働く姿が見えなくなっている」というのは、こんな小さな山村でも同じです。田んぼ仕事のこともよくわかっていません。そして、自分たちが密接に関係している自然も。

しかし、例に漏れず、この地域の親たちも苦しいくらしを余儀なくされています。その中で、懸命にくらしています。しかも、市町村合併のために、勤務条件が悪くなった役場の職員の方も、親の中にはかなりいます。そういう現実がありながら、子どもたちは、それとは無関係に生活をしているといった調子です。いつまでも、自分中心の傾向がぬけきらず、それどころか、少人数の人間関係を何年も続けているために、「なれ合い」「もたれ合い」のような状態もあって、子ども同士のことについても、きちんと見つめられないでいます。

そんな子どもたちに、少しでも家族や友だちのことに心を向けた作文を書いてもらいたいと思って、

①～と～をしたときのこと　②台風十八号　③心が動いたこと　④人の姿を見つめて

と、授業を組みました。

ただ、そこでの授業は、特に力を込めたものではありません。

①は、主題意識をもたせることもねらいとして「～と～して～と思った時のこと」という長い題名をつけて書くように指導しました。この題名だと、当然、だれかとのかかわりを書かざるをえません。この時は、友だちとのことが多く出ました。

②は、臨時休校になった台風襲来のときのこと。きっと、家で、いろいろな姿があっただろうと思って、書かせました。この中で、父が郵便局長をやっている子の作品は、父が登場するのに、ほとんどその姿が描かれていなかったので、書きくわえを要求しました。が、最初に書かなかっただけあって、父の仕事に対する関心は低いものでした。ただ、こうやって書き加えることによって、父親の仕事について、少しでも意識が向いてくれたとしたら、成功だと思います。ましてや、今や、郵政民営化で矢面に立っている父です。

③は、②のときの書きくわえをした作文を参考にして、さらに、人の姿を見つめさせたいと思いました。が、これも、家族以外に目が向き、しかも、人の姿を見つめるというようにはなりませんでした。

④は、もう最後ということもあって、できるだけ家族について書くようにと要求しました。しかし、本当に書きたいという思いがあって書いた子は少なく、やはり、量的にも内容的にも、意識・認識としても弱いものになってしまいました。

結局、一番大切に思っているねらいについては、ほとんど目標に近づけないまま終わってしまいました。

毎年、こうやって失敗し、自分の指導力のなさを棚に上げながらひとつのジレンマに陥ります。それは、もっと強引に書かせるようにしてもいいのではないか、ということです。どんなに抵抗があろうが、ひとつの大切な学習課題として、家族をしっかりとらえさせるということを強制的にでもやらせてもいいのではないかと。実際、ほとんど強制のような形でとりくんで、すばらしい作品を書かせている実践もあるようです。強制は作文教育には馴染まないだろうと思いますが、家族の姿を見つめられないまま終わるよりも、強制してでも、家族の姿を見つめさせることができた、ということの方が、子どもにとって価値あることではないかと。しかし、たぶん僕には強制することはできないだろうと思います。それは、強制が悪いからとかというよりも、自分の性格として、人に強制することができないからです。これは、自分の弱さでもあるだろうと思います。もちろん、一番望ましいのは、強制ではなく、子どもたちが自分から家族のことを見つめて書けるようにする手だて・指導を構築することです。これも、たくさんの実践家が示してくれています。教員をやめるまでには、一度でいいから、そういうふうにしてみたいものだと思います。

■　S君のこと

昨年、家族だけでなく、友だちのことも意識的に目を向けてほしいと思った理由に、S君の存在があります。

先に述べたように、子どもたちは、幼稚園の時から、ずっと一緒の集団です。S君も、その中の一人です。ただ、他の子と違うのは、S君が進行性の筋ジストロフィーの患者だということです。幼稚園のころは、歩いて通園していました。小学校にはいると、たびたび転ぶようになり、ヘッドギヤーをして過ごすようになりました。三年生からは、車イスの生活になりました。四年生からは、電動車イスの生活になりました。

明るく活発で利発なS君です。身体的には大きなハンディを負っていますが、いつも明るく、口では負けていません。他の子も、そんなS君を、当たり前に、友だちとして、仲間としてつき合ってきました。ただ、S君の状態がどんどん悪くなり、他の子とはちがうかかわりをもつことをのぞまれるようになりました。車イスの時は、移動時にはだれかが押さねばなりません。ものが落ちたら、だれかが拾わねばなりません。電動車イスになったころには、授業の準備や片づけ、ときにはえんぴつをとったり消しゴムをとったりするのも、だれかが力を貸さなくてはなりません。他の子たちには、S君がどういう状態なのかが理解できていないために、だんだん、自分でできることが少なくなり、周りの子がいろいろと「世話」をしなくてはいけなくなったことに、ストレスを感じる子も出てきていました。「前は、自分でできてたのに、なんで、今はせんの？」という、ごく当たり前の素直な疑問です。それは、S君自身のジレンマでもあったようでした。今までできていたのに、できなくなっている自分に対するもどかしさのようなものがあったようでした。それだけに、友だちに、素直に頼むということもできにくい状態になっていました。昨年の一学期は、そうしたすれ違いのような状態が大きくなって、S君をうっとうしがるような子も出てきていました。

ちょうど一年前の今ごろ、S君の両親は、本人に自分の病気について、主治医から告知してもらう決心をしました。